

◇拠点形成概要

機 関 名	京都大学		
拠点のプログラム名称	心が活きる教育のための国際的拠点		
中核となる専攻等名	教育学研究科教育科学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー)	子安 増生 教授	外 18 名
〔拠点形成の目的〕 20世紀は、科学・技術・産業などが飛躍的進歩を遂げると同時に、貧困・犯罪・テロリズム・地域紛争・戦争・環境破壊のような人類の宿痾というべき矛盾を克服することができず、21世紀においても、近代社会の限界から生ずる個人、社会、地球全体のさまざまなレベルにおける解決困難な課題が持ち越されている。学校教育という場面に限定して考えても、いじめ、校内暴力、不登校という学校関係者や保護者を悩ませる現象は、人間の心のあり方について大きな問題を投げかけてきた。人間が作り出すさまざまな制度や組織は、本来そこに生きる人間の心が活きるものでなければならないが、現実には制度や組織が人間を苦しめたり、心を萎えさせたりしている。 人間は、教育というものを通じて、知識と技能を獲得することによって自身が何事かをなすことができるという有能感を得、自然や社会とつながることによってこの世界に生きているという生命感を得る。さらに、この2つの感覚を一定の目標に向けて十分に発揮することによって何かをなしえた達成感というものが得られる。そこに、同時に幸福感というものを感ずることもできるよう。反対に、このリンクの一部あるいは全部がうまく機能しないとき、様々な問題が起こってくる。心と教育の諸問題に注目が集まる今日の社会において、このような枠組みから「心が活きる教育」を研究する国際的教育・研究拠点を構想し、その諸問題に取り組む人材を育成する拠点の設置が強く求められており、本プログラムはそれに真正面から応えようとするものである。 〔拠点形成計画及び進捗状況の概要〕 拠点形成計画 本プログラムは、京都大学の心理学および教育学の研究者が有機的に連携しながら、国際的に活躍する有為な人材育成のための新たな拠点を形成するものである。拠点リーダーが全体を統括しながら、(A)「心が活きる」とはどういうことか、逆に「心が生きていない」状態とはどのようなものかを研究する基礎過程、(B)「心が活きる」ために必要な制度設計と、それを社会に説明し実際に運用する仕組みについて研究するシステム、(C)「心が活きる」ために有効な心理的サポートや教育的かかわりのあり方について研究ならびに実践を行うサポート、(D) 以上の各ユニットが提案する理論・実践を「心が活きる」という観点から評価し、同時に国際共同研究として「幸福感の国際比較研究」を実施する開発評価という4つの研究ユニットを中心に高度な水準のユニークな研究を進めていく。 人材育成の面では、心が活きる教育ということについて心理学・教育学の観点から深く考えることのできる高度の専門性と幅広い視野を持ち、外国語による論文の投稿や国際学会での発表など、国際的に情報発信ができる人材を育成するために、心理学・教育学の大学院教育を拠点全体で担う教育体制を一層整備・充実すると共に、国際拠点形成の活動として、米ミシガン大学、英ランカスター大学、中国中央教育科学研究所、北京師範大学、独ベルリン自由大学、英ロンドン大学教育研究所などの世界的研究機関との間に築いてきた学術交流協定に基づく教育・研究活動をさらに展開し、京都大学を世界中の心理学・教育学の研究者が研究の発展を求めて集まる拠点としていく。また、広い視野から深く考え、心と教育に関する諸問題の解明・理解・実践に貢献しうる人材の進路が、大学等の研究機関のほか、官庁・企業等にも広がるよう、その支援体制を一層整備する。 進捗状況の概要 平成19年度および20年度の事業は、きわめて順調に進んでいる。拠点の運営にあたる執行委員会は、2年間で27回の会議を開き、助教および研究員の採用人事、各ユニットの研究プロジェクトの公募と資金配分、20代～30代の若手教員のための競争的研究資金ならびに博士課程大学院生のための人材育成経費（海外留学資金、大学院生養成経費、研究開発コロキウム）の公募と採択決定、研究室相互訪問プロジェクト（EXラボ）および大学院修了後キャリア形成プログラムなどの事業の企画と実施を進め、拠点ホームページ（日本語、英語）の立ち上げと管理体制の整備にあたってきた。また、国際公募で採用したドイツ人の助教ほか4人の外国人教員の協力を得て、幸福感の国際比較研究の準備を進めた。平成20年11月には自己点検・評価報告書を作成し、その資料を中心に、国内の心理学および教育学の著名研究者各3人に外部評価の実施を依頼した。その結果、拠点の活動に対して大変高い評価を得ることができた（21年3月に報告書刊行）。			

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

(総括評価)

現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、総長を中心とした全学的なマネジメント体制が充実しており、大学の将来構想の下で、拠点に対しての十分な支援がなされていると評価できる。

拠点形成全体については、世界的拠点として順調に事業を推進しており、評価できる。

人材育成面については、課程博士の授与数を高めるために集団指導体制を取入れており、タコつぼ型教育に陥らないよう、「研究開発コロキウム」、「EXラボ」を設けて視野が広がるように工夫しており、評価できる。また、大学院学生のインセンティブを高める努力が、大学院学生の国際学会の実績、研究実績の伸びとなって現れていることも高く評価できる。

研究活動面については、心理学と教育学が連携融合して、「心が活きる教育」という概念を解明しようとしており、また、心理学と教育学それぞれの方法論を持ち寄り「幸福感」を追求しようとしていることから、そうした連携融合の観点からの世界的拠点形成が課題となるが、まだ十分とは言えない状態に留まっており、現状への反省的取組みによって、今後の成果が期待される。

補助金の適切かつ効果的使用については、概ね順調に使用され、本拠点への補助金額の減額の中で、事業推進担当者が競争的資金を獲得し、当初計画を実現するための取組みに努力していることは評価できる。

今後の展望については、「心が活きる教育」という概念装置を「国際的な教育理念」や、「教育プログラム」とするための理論的な枠組みを提示すること、及び心理学と教育学の更なる連携融合の方途の探究が必要であり、また、幸福感の国際比較研究については、欧米だけではなく、アジア諸国、宗教観や道徳観の異なる国々も対象国とすることについて、検討が望まれる。